



千葉県議会議員（浦安市選挙区）

矢崎堅太郎

千葉県は間もなく政治の季節を迎えます。というのも森田知事の任期が来年4月迄となっております。3月には知事選挙が行われるからです。今のところ出馬表明をした人はいませんが、これからいろいろな動きが出てくると思います。

さて、新型コロナウイルス感染症の対応をめぐり全国の都道府県知事の対応が注目されました。これまで、知事は誰がやっても同じと、多くの有権者が考えていたと思いますが、それは違っていたということが今回はっきりと示されました。

そこで、この巻頭言では、森田知事を県議会の場で、知事になってから現在まで11年半に亘って見てきた者として、森田知事を通して、知事のあるべき姿について考えてみたいと思います。

知事の最初の議会となった2009年6月議会での第一印象は、自分の言葉で語らない方だな、というものでした。それまでの芸能活動での「俺は男だ！」に代表される、熱血のイメージとはかなりかけ離れていました。議会答弁は職員が書いた答弁を淡々と読み上げるだけ。前任の堂本知事が逆に自分の思い入れが強すぎて議会答弁が長くなっていたのとは対照的でした。

このことについて森田知事は、「思いが強すぎると余計なことを言ってしまう。だから自分は間違いのないように正確に答弁したい」というような主旨の発言をしていたと記憶しています。しかし、二元代表制である県議会は共に県民から選ばれている知事と県議会議員が真剣勝負で議論する場。であるならば、様々な県政の課題やビジョンについて知事がどのように考えているかを自分の言葉で語らなければ、難しい問題になればなるほど、県民の共感や納得は生まれにくくなると思います。

もう一つ、知事は職員に対して、「責任は俺がとるから、君たちは思い切って仕事をやれ！」と言っていると聞きます。これを、「森田イズム」と名付けるとするならば、昨秋の千葉県を襲った台風・豪雨被害の時こそ、幹部職員の皆さんには、この「森田イズム」を発揮して貰いたかったと思います。最初の台風15号の発災当日には、知事は県庁に登庁せず、初動対応が遅れたとの指摘を受けています。このときに副知事や防災危機管理部長が、知事がなんと言おうと県庁に登庁させるとか、連絡がつかないのであれば、知事に代わって指示を出す等の対応をすべきであったと考えます。しかし、実際には幹部職員が知事に対してそうした進言や行動を起こすことはありませんでした。

これでは、「森田イズム」が浸透していなかったことになります。これは私の推測ですが、職員の意識が、「思い切って仕事をやれ！」が、いつの間にか「好きなように仕事をやれ！」に変化したのではないかと考えています。そうすると仕事は楽にしよう、とか、指示されたことだけをしよう、という所謂、指示待ち型の職員が増えてくる心配があります。

以上のことから、私の考える、あるべき知事の姿とは、「自らの政治信条、理念、政策を自分の言葉で語り、県民が何を考えているのか、何に困っているのかを現場に行って自分で確認し、職員とは意思疎通を図りながら、一緒に考え一緒に汗をかいて仕事をする。」そんな風に思います。

来春にはどのような方が知事になっているかわかりませんが、こうした姿勢で取り組んで欲しいと願っています。